

## 跡見花蹊女史



跡見花蹊女史

上人が学徳兼備の高僧であられたことは、今さらいうまでもないが、如来様の靈育を豊かに受けられた上人の御徳の輝きは、そのお姿の上にもはつきりと拝せられ、あるお方には生ける地藏菩薩の如く拝せられた。また、御説法中のお姿は、京都百万遍知恩寺蔵の善導大師御画像に生き写しにしましたと。全国光明会員は、老若男女を問わず、上人を渴仰し奉ったのであったが、いわゆる、知識階級の中にも、上人の学問と人格に傾倒した人々が少なくなかったのである。

たとえば、愛媛大学の川本正良氏は、「最初の印象」と題する文章に、上人とのめぐり合いを、感激をこめて記しておられるが、「笹本上人を偲ぶ」と題する別の文章の中で、上人の「真実の自己」が学問的にも重要な意味をもつものであつて、いかに卓越した説教であるかを説明し、自身この「お話を聞き、数日にして百八十度の廻転をしたことを思い出す」と述べ、上人こそは現代の要求する真の説教者であり、偉大なる指導者である、と讃えておられる。

また、名古屋大学の太田耕治氏は、自分の光明主義入信の端緒は、「戒浄上人の御人格にふれて、上人のようにならしていただきたいという、厚い上人への



川本正良先生

(15) 大光明八六号。

(16) 光明二二七号。

(17) 細井良亮氏稿「太田耕治先生を偲ぶ」・光明二四〇号参照。



犬塚助次郎氏

(18) 「礼拝儀講話(全集上巻四〇―四一・一〇八頁)」、「三昧の念仏について」七・八(光明五一五・五一六号)。

(19) 跡見先生については、熊野好月先生著「み手にひかれて」九八―一〇五頁に詳しい。また、同書九四―九六頁には、三島通陽氏関係の記述がある。犬塚助次郎氏については、高橋源次氏稿「笹本上人様と犬塚助次郎先生の思い出」一一三(新・大光明一一六・一一三二・一三三三号)を参照されたい。

「帰依に基づく」ということを、しばしば語られたという<sup>(17)</sup>。

上人に帰依した有識者は勿論、学者に限られていたわけではない。例えば、女流教育家として著名な跡見花蹊女史、鎌倉光明会の恩人といわれる海軍少将犬塚助次郎氏、ボーイスカウトで有名な子爵三島通陽氏(同氏の蒲田や那須野の別荘では、別時會が開かれたこともある。本章口絵写真参照)らが、深く上人に傾倒されていたことは、周知の事実である。跡見先生は、初め日蓮宗の信者であったが、上人の導きによって念仏者となられた。先生の信仰の歷程については、上人の法話<sup>(18)</sup>の中に述べられているが、真剣に念仏三昧を行じられた結果、如来様のお育てを豊かに受けて、尊い境涯に達しておられたことがわかる。上人は、先生の信仰の指導者であり、かつよき理解者であられた。そして上人は、先生がすぐれた教育者で、人格者であることに対しては、敬意を表しておられた。上人が先生を尊敬しておられたことは、二人のお嬢様を跡見女学校に入学させられたことからでもわかると思う<sup>(19)</sup>。